# 序
# Preface

富山大学の杉谷キャンパスは，医薬学に関する教育研究の一大拠点になっています。再編・統合後の富山大学の特色のひとつは，多様な教育研究分野を擁する総合大学になった点にありますが，特に，同キャンパスに設置された医学部，薬学部，和漢医薬学研究所，附属病院の多様な研究成果は，『富山大学杉谷（医薬系）キャンパス研究活動一覧』として纏められ，刊行されてきました。今回の『研究活動一覧』は旧富山医科薬科大学時代から数えて，第 32 輯になります。

私は杉谷キャンパスの研究成果の公刊にあたり，社会科学の視点から今後の医療に対する個々人の役割の重要性について述べたいと思います。

わが国は少子化の急進展により，確実に超高齢化社会に向かっています。このような社会の到来に対しては，個々人が一層医療に関与することが重要になってくると思われます。つまり，一方で，日常生活において個々人が主体的に健康維持と疾病予防を行い，他方で，いざという時には病院で高度な医療を受けられるように，社会的な責任で医療環境の整備を進めなくてはなりません。

ところが現実の社会では，地方における医師不足，看護師不足が顕在化する中で，昨年（平成 20 年）9 月のアメリカのサブプライムローンに端を発した，100 年に一度といわれる経済不況が世界中に広がっています。巷には，自動車，電機などわが国の基幹的な輸出産業の急激な減収や多数の派遣労働者の失業などのニュースが溢れています。個人所得の減少や財政収入の落ち込みにより，個々人の健康維持の活動や医療環境の公的な整備に暗雲が立ち込めはじめました。

私たちは超高齢化社会の到来に備え，これまで以上に健康・医療問題に踏み込み，真正面から受け止めるべきです。病気になれば病院へ，医療機関は公共団体が整備すべきという受身の姿勢を捨てるべきです。自らの責任と努力で健康を維持し，自らが直接，医療環境の整備に貢献するくらいの強い意思がなければ，超高齢化社会を支えられません。個々人が自らの健康維持と地域の医療環境の整備を同一次元の問題として捉え直す時期に来ています。

最後に，今回の『研究活動一覧』の刊行にご尽力された編集委員会各位に厚くお礼申し上げます。1 人でも多くの研究者の方々に，この研究成果を活用していただけるよう祈念いたします。

学　長　　西　頭　徳　三

President　Saito　Tokuso